



UReC Newsletter vol.02

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/00017873

Topic.01

防災推進国民大会2022に参加しました

都市科学・防災研究センター 教授 生田 英輔

7回目となる防災推進国民大会(ぼうさいこくたい)2022が10月22日と23日に兵庫県神戸市のHAT神戸を中心とするエリアで開催されました。仙台防災枠組2015-2030で国際的に自助・共助の重要性が認識されたことを受け、内閣府や防災推進協議会が2016年からぼうさいこくたいを開催しています。ぼうさいこくたいは防災に関する活動を実践する多様な団体・機関が集まり、取り組みや知見を発信・共有するイベントです。今回の現地来場者実数は約12,000人、オンライン視聴実数は約11,000回でした。

都市科学・防災研究センターは国際協力機構関西センター会場にて2つの出展に関わりました。1つ目はセンターで取り組んでいるコミュニティ防災人材育成プロジェクト「MUSUBOU」のポスター掲示です。MUSUBOUはオープンな仕組みであり、来場されている防災への関心の高い方に興味を持ってもらうだけでなく、MUSUBOUへの参加につながればと思いポスターを作成・掲示しました。2つ目は公立大学防災研究センター連携会議(DREC-NPU)のブース出展です。連携会議参加校の紹介ポスターを複数枚作成し、掲示しました。ブースでは兵庫県立大学、京都府立大学の先生方と一緒に来場者への説明、資料配布を行いました。ブースを訪ってくれた他大学、研究機関、企業等との意見交換も活発に行い、センターの今後の

活動に大いに役立つ機会となりました。

体験型の出展では、「地震ざぶとん」でVR機器を使用しながら実際の地震を体験できるコーナーが人気で行列ができていました。屋外には消防・自衛隊等の大型車両の展示やライブもあり、防災の関心のある市民の方が気軽に訪れ、防災を学ぶ機会にもなっていましたようです。当日は絶好の行楽日和の中、丸一日楽しめるイベントとなっていました。このように専門家、行政、研究者、実践家等が市民とともに一同に会するイベントは改めて有意義だと感じました。

2023年は関東大地震から100年です。2023年のぼうさいこくたいは関東大地震の被災地である神奈川県での開催が予定されています。センターとしましても、ぼうさいこくたいを始め各種イベントに積極的に出展し、幅広く活動を知ってもらうとともに、連携機関の拡大も目指していく予定です。



MUSUBOUのポスター掲示



公立大学防災研究教育センター連携会議の展示ブース

Topic.02

「シェア防災」プロジェクト

都市科学・防災研究センター 教授 生田 英輔

NHK大阪放送局と都市科学・防災研究センターが共同で取り組んだ「シェア防災」プロジェクト。このプロジェクトは幅広い世代に防災を広げていくことを目指して、6月からスタートしました。ワークショップには多数の学生の参加があり、NHKの防災コンテンツの紹介を踏まえ、若い世代がシェアしたくなるコンテンツをディスカッションしました。その結果、若い世代が最も親しみやすいのは動画であるということになり、学生有志が防災に関する動画コンテンツをNHK大阪放送局の協力の元、作成しました。

動画の作成にあたっては、数十秒程度のいつでも気軽にスマホで視聴できるものとして、秒単位での映像やナレーション構成を検討し、撮影となりました。今回は防災用品に焦点を当て、大学近くの商店街で災害時に役立ちそうなものを購入し、実際にバッグに詰めました。一般的な防災用品以外にも、大学生らしいアイデアで、遊び道具やお菓子も選んでいました。これらは避難所生活で役立つだろうという発想のことです。

完成した動画のお披露目の場も兼ねて、11月3日に杉本キャンパス 田中記念館ホールにて、「防災をシェアしよう!」のトークイベントを開催しました。

イベントのスペシャルゲストにはロザン(吉本興業)のお二人を迎える、客席には事前募集の本学学生を中心として約150名が集いました。司会は都市

科学・防災研究センターの特別研究員であるNHK大阪放送局の大山武人アナウンサー、ロザンのお二人以外には、動画を企画・制作した有志メンバーの上岡ひなさん(法学部1年)と疋田和輝さん(工学部4年)と生田が登壇しました。

生田からは災害時の共助とシェアの意義、過去の災害での困りごと等を解説しました。上岡さんや疋田さんは若い世代の率直な防災への意識を話してくれた上で、今回作成した若い世代がSNSでシェアしやすい動画のポイントを解説してくれました。大学生目線で防災バッグをゼロから作るプロセスを見せてことで、若い世代の共感をより得やすいのではということでした。このプロジェクトはNHK総合「ほっと関西」やNHKラジオ第1「関西ラジオワイド」で放送されました。



トークイベントの様子



イベント終了後に登壇した学生さん・大山アナウンサーと

イベント報告

第11回東アジア包摂都市ネットワークワークショップが開催されました

都市科学・防災研究センター 教授 全 淩奎

開催概要 8月23日から26日にわたり、「分断都市・脆弱都市から多様性が尊重される包摂型レジリエント都市へ」というテーマでワークショップが開催されました。今回のワークショップは、「都市科学・防災研究センター」の設立を記念するものもありました。

【重松孝昌所長による開催の挨拶】



1日目(8月23日)は、杉本キャンパス学術情報総合センター文化交流室で、重松孝昌所長による開催の挨拶を皮切りに始められました。セッション1では「各都市における社会的弱者の現状と支援政策や実践経験の理解と共有」、セッション2では「災害に強い都市とレジリエンス」というテーマで、日本、韓国、台湾、香港からの参加者による報告が行われました。午前中のセッションを終えて向かったのは、生野区内のコリアタウンに隣接する「いくのコーライブズパーク」でした。同区は、国内でも有数の外国籍住民の集住地として知られ、同パークでは小学校の跡地を活かした、複合型多文化共生の交流拠点整備事業を展開していくことが紹介されました。

【いくのコーライブズパークでの現地視察の様子】



2日目は「八尾市立安中人権コミュニティセンター」を会場に行われた。セッション開始に先立って、特定非営利活動法人トッカビによる「八尾市と外国人」、そして八尾市でベトナムからの移民第二世代を対象にした「継承語教室」に対する紹介がありました。地域巡回後のセッション3では、「都市におけるダイバーシティと難民・移住者等外国籍住民との共生の課題」が開催され、各都市における多文化社会の広がりや、それに対応した民間創意による実践事例について学び合う機会となりました。

【結婚移住者自助組織TALKTOME代表の発表】



3日目は、午前中は、泉北ニュータウンで実施している「公共冷蔵庫」事業への現地視察、午後からは中百舌鳥キャンパスに移動し、セッション4「都市ネットワーク会議」を開催しました。同セッションでは各国都市行政から派遣された職員等による報告が行われ、先進的な都市行政の施策交流の場となりました。

【生野区の施策について報告している筋原生野区長】



4日目は、「インクルーシブシティ研究会第2回年次研究大会」が行われ、各国の若手研究者間の交流を行いました。

今回のワークショップは海外からの参加者とオンラインでの参加者を合わせて、延べ350人を超えるました。今回の成果を踏まえ、来年の第12回ワークショップは台北市で開催することが合意されました。

新型コロナウィルスによる感染症の影響で、国連ハビタットは世界的に約20年ぶりに困窮層が増加していると警鐘を鳴らしています。それに加え、ロシアのウクライナへの侵攻による大量の難民の発生、中国による香港や台湾への霸権的圧力の高揚等から見られる、対立と葛藤の様相が社会を分断状況に陥れています。それに加え雇用の破片化やデジタル化が加速する中、子ども・若者、女性など弱者の生活へのしわ寄せと孤立・孤独が危惧されています。これらの諸課題に取り組むため、ここ10年以上にわたり「東アジア包摂都市ネットワークジャパン(EA-ICN)」の形成に向けた努力が続けられてきました。

今回のワークショップは、そのネットワークのさらなる発展に向けた起点として、都市間の交流をいっそう進める場となりました。

イベント報告

第12回オープンナガヤ大阪2022を久しぶりの対面で開催!

オープンナガヤ大阪実行委員会事務局スタッフ学生

開催概要 2022年11月12日・13日に「第12回オープンナガヤ大阪2022」を開催しました。大阪の住文化を代表する長屋での日常を"暮らしひらき"する一斉公開イベントであるオープンナガヤ大阪は、2011年に始まり今年で12回目を迎えました。過去2年間はオンラインのみでの実施となりましたが、今年は3年ぶりに現地で長屋を体感できるプログラムと、オンライン上で長屋の魅力を感じられるプログラムを用意し、ハイブリッド形式で実施しました。今年のメインプログラムは、長屋ツアーです。長屋に住む人、改修を手がける建築家や学生による案内のとも、いくつかの長屋とその周辺の町並みを見て回りました。

豊崎めぐり

「豊崎長屋・主屋」の説明・見学の後、3グループに分かれ、改修中の現場「豊崎長屋・東長屋3」、個人宅の「豊崎長屋・東長屋1」、織物教室の「SAORI豊崎長屋」をローテーションで見学しました。2日目は、長屋を現代風にリノベした「Re:Toyosaki」も見学しました。(田中)

福島めぐり

野田まち物語さんのガイドを聞きながら街歩きをしつつ、長屋を活用した老人ホームや戦前から残る長屋を見学しました。(川向)

中津めぐり

中津周辺の街歩きの後、「SPACESPACEHOUSE」を訪れ、1階事務所と2階住居部分を見学しました。(万見)

空堀めぐり

多くの長屋が残るエリアを街歩きしながら、登録有形文化財やブックカフェとして活用している長屋を見学しました。(上坂)

天下茶屋めぐり

2軒の長屋の内見の他、町に残っている様々な長屋を巡りました。参加者の中には長屋に住んでいる方もいらっしゃり、互いに交流を楽しむ様子が見られました。1軒目の「松虫通3丁目の長屋」では施設の概要を説明して頂き、1階と2階をそれぞれ見て回りました。2軒目の「カエルハウス」では、長屋の見学の他、昔の新聞のスクラップや蔵の写真などの資料を見せて頂き、昔話に花が咲いていました。(山口)

平野めぐり

建築家の吉永さんのガイドで計5つの長屋を回りました。4つ目までは吉永さんが改修を手がけた長屋で、建物の歴史や設計のポイント、改修費用など幅広く貴重なお話をいただきました。5つ目の長屋はアトリエ兼地域の居場所となっており、たくさんの油絵や造形作品が素敵でした。こちらでオーナーの方が淹れるレモンのお茶を飲みながら、まちあるきの感想に話が弾んだところでツアーは終了となりました。(吉田)

生野めぐり

「須栄広長屋」はツアー限定で内部が公開され、住まいとしての長屋を見ることができました。「林寺二丁目長屋」では改修前の写真と改修後の姿を見比べてガイドの吉永さんのお話を聞きました。「イリマメニハナ」のコーヒーでひと休みし、「レンタルスペース木もれび」へ。そこは思わず座りたくなる小上がりのある落ち着く空間でした。4時間のツアーでしたが、様々な長屋のカタチに触れながら最後まで楽しんでいただけました。(今岡)

阿倍野めぐり

昭和町周辺は、昭和初期に大規模に建設されたお屋敷のような立派な門構えと前庭のある長屋が特徴です。ここのツアーでは6か所の長屋を訪問しました。竣工当時の意匠を活かしつつ現代的な家具や仕上げを取り入れた

こだわりの住まいからは皆さんが楽しみながら長屋で暮らしている様子が伝わってきました。道中では様々な種類の長屋を見学し、2日目の後半は日が落ちてきた街で長屋からあたたかな明かりがもれる風景も楽しめました。(呉屋)

大正めぐり

改修済みの「ヨリドコ大正メイキン」と工事中で枠組みだけが残るその「南棟」。改修途中で前後の様子が入り混じる「泉尾4丁目長屋」を見学させていただきました。さらにまち歩きではそれぞれの長屋の特徴を、当時の写真や背景などとあわせて解説していただきました。現存する長屋の様々な面を見ることができたツアーでした。(井岡)

住之江めぐり

紀州街道沿いの安立商店街に並ぶ、市大モデルで改修された「鳴屋喜兵衛商店」からツアーがスタートしました。改修当時の様子について、図面や写真と共に聞きし、内部を見学しました。その後、洋風長屋が残る西住之江へと向かい、和風、洋風と時代ごとの長屋のデザインの特徴に注目しながら街歩きを行いました。参加された方同士で「私は洋風より和風長屋の方が好きやわ。」とお話をされていたのが印象的でした。(高橋)

東大阪めぐり

東大阪エリアでは2日間で内容の異なるツアーを実施しました。「ながやR」ではセルフリノベーションに対する思いを伺い、「ながせのながや」では写真展や模型展示を通して、地域と歩んだ軌跡を知ることができました。「菱屋西染め色遊び」ではクイズを通して長屋への知見を深めました。また移動中には、参加者から通りすがりに見つけた長屋に対しての声も上がりました。本ツアーが長屋での暮らしだけでなく長屋のあるまちに対しても目を向ける機会になったと感じます。(山下)

照明ギャラリー

豊崎エリアで行われた「照明ワークショップ&路地ギャラリー」では、長屋改修の工事現場から出た廃材を利用して照明をデザインしました。



生野めぐりの様子



空堀めぐりの様子



大正めぐりの様子



住之江めぐりの様子



東大阪めぐりの様子



ワークショップで制作された照明

研究教育活動紹介

防災ミュージアム

狹山池:災害履歴を刻む日本最古のため池

大阪狭山市の狹山池は古事記・日本書紀に記される日本最古の灌がい用ため池で、天野川の谷をせき止めて築かれ、かつては河内平野のほぼ中央までの80ヶ村を潤してきました。現在は、平成の大改修(2001年完成)で灌がい・治水用ダムとなっています。狹山池は、大雨や地震によって堤が決壊し、貯水機能を失ったことが幾度もあります。その修復に奈良時代の行基、鎌倉時代の重源、安土桃山時代の片桐勝元らが携わり、当時の技術で修復を行っています。平成の大改修では、池の堤を切断する学術調査が行われました。堤の度重なる修復の痕跡や、東樋管の木材年輪年代が616年を示し、推古朝に築かれたことが明確になり、古事記の記述にみあう科学的証拠も得られました。また、堤の盛土が池側に大きく滑り出した痕跡が見いだされ、1596年慶長伏見地震によるものであったことが判明しています。堤に隣接して狹山池博物館があり、堤体断面が保存され、池の歴史を学ぶことができます。



池の堆積物に舌状に滑り出した堤の盛土(1993年三田村撮影)

地域貢献

上田貞治郎写真史料アーカイブ

『旧大阪および紀州より関西諸所』より「廣島城」

都市科学部門では文学研究科・都市文化研究センターの21世紀COE、旧都市研究プラザのグローバルCOE事業を継承し、20世紀初期の業界を牽引した上田写真機店社主・上田貞治郎(1860-1944)が遺した写真史料の寄託をうけて管理しています。

この秋は明治期の古写真コレクションから一点を、広島城の企画展「写された広島城」に提供し、たくさんの方にご覧いただくことができました(会期 9月10日～11月6日)。

この写真は、暗箱を担いで全国の名所旧蹟を行脚した和田猶松の撮影で、戊辰戦争のあと鎮台が置かれるにあたり建造物の大半が解体された1872(明治5)年以前と推定されます。天守は右手に見切れていますが、本丸裏御門を北東角から撮影した構図は珍しく、北東隅櫓の外観も精細で、木造建築の構造および損傷の様子をうかがえる希少な写真として、広島市文化振興課においても城郭の復元に向けた基礎史料として利用されています。



防災研究

都市防災研究シンポジウム・サインエスカフェを開催

11月12日に第9回都市防災研究シンポジウム、11月18日には第31回となるサイエンスカフェを開催しました。シンポジウムでは、文理をまたぐ多角的な視点から7件の論文発表があり、活発な議論が交わされました。シンポジウムで発表および投稿された論文については、電子ジャーナル「都市防災研究論文集 第9巻」として大阪市立大学学術機関リポジトリでご確認いただけます。サイエンスカフェでは、都市科学・防災研究センター兼任研究員で看護学研究科 講師の畠山 典子氏から「女性と防災・減災の可能性～暮らしと防災の日常化を考える～」をテーマに話題提供いただきました。ご自身の経験に基づいた事例から、災害時の女性、さらには男性が抱える特有の課題についても紹介いただき、東日本大震災以降で変わったこと、変わらなかったことについてもお話をありました。どちらもオンラインを併用した開催となり、遠方からの参加者も含め、大学・行政・市民といったさまざまな立場の多くの方にご参加いただき、貴重な機会となりました。



機関リポジトリ



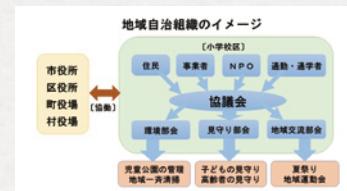
第31回サイエンスカフェ(畠山先生)

都市のキーワード

地域自治

小学校区くらいの地域で、そこに暮らす住民たちが、地域をより良くするための様々な活動に力を合わせて取り組むための協議会型の組織を形成する事例が、各地で見られるようになっています。多くの市区町村が、公民協働の推進という観点から、そうした住民組織に活動資金を交付し、その使途は住民組織の側である程度まで自由に決めらるという制度を設けています。こうした制度は、地域自治の仕組みと呼ばれることが多いです。

住民組織の典型は、かつては、世帯単位で加入し、しかも地域内の全世帯が加入するものとされた自治会や町内会でした。それに対して、近年活性化しているのは、住民一人ひとりが、自らの主体的な判断に基づいて個人として加入する組織で、その多くが、地域外から地域内に通勤・通学している者や、地域で活動するNPOや事業者なども加入できる、開かれた組織となっています。こうした住民組織の活性化の背景には、世代交代に伴う従来型の自治会や町内会の衰退や、市町村の財政状況が厳しくなり、様々な公共サービスを従来通りに提供することが困難になりつつあるという現実があります。



お知らせ

都市科学・防災研究センターでは、ワークショップや講演会を開催しています。詳しくはホームページをご確認ください。

「コミュニティ防災フォーラム2023」を開催します!

日時:2023年2月18日(土)14:00-17:00

場所:大阪公立大学 杉本キャンパス 学術情報総合センター

※今後の状況によってはハイブリッドもしくはオンライン開催に変更することがあります。

対象:大学生、防災・行政・教育・福祉関係者、地域防災に関心のある方

<プログラム>

- ・開会あいさつ
- ・副学長あいさつ
- ・基調講演:「京都発!レジリエント・シティへの挑戦と課題」
藤田 裕之 氏(レジリエント・シティ 京都市統括監/元京都副市長)
- ・パネルディスカッション:「多様な都市課題に対応したレジリエント・シティとは」
- ・活動報告(UReC都市防災部門)
- ・閉会あいさつ

